4. 乳幼児保健指導と母子相互作用仮説

小　嶋　謙四郎（早稲田大学文学部）

はじめに

この研究は，乳児期母子相互作用理論に基礎をおき，保健所などの乳幼児保健指導の現場で，容易に活用できる精神発達遅滞の早期発見の方法を検討したものである。

はじめに，母子相互作用理論による発達臨床仮説について概説し，つぎに，発達遅滞の評定法をとりあげてみたい。

発達臨床仮説

この20年間，保健所の3歳児相談を通じて集積してきた言語発達遅滞の事例を基礎に，われわれの発達臨床仮説をのべる。

はじみに，1，発達臨床の正常と異常についてのべ，これら行動型の発達の形成過程として，2，乳児期行動システムの発達をとりあげ，3．新生児期母子相互作用の機能の重要性を論ずることにする。

1．発達臨床の正常と異常

われわれは，正常の基準として，探索ーアタッチメントシステムの発達に注目している。この行動システムは，1）エソロジイや乳児期発達心理学の基礎的研究によって，その発達のしくみや，機能が明らかにされており（小嶋1981），2）従来の発達遅滞，情緒障害，行動異常などの多くがこのシステムの発達の障害や遅滞の視点から理解されうる可能性をもち，また，3）これらの両システムの発達の評価を，プレイルームの行動観察によって容易に実施することが出来，4）発達指導計画の立案と実施に，ひろく心理学の基礎的研究の成果を活用することができる，などの諸点から臨床的に有用性のある正常ー異常の基準であると考えられる。

そこで，「探索」と「アタッチメント」を「正常型」とし，発達異常の臨床型として，「依存」「攻撃」「逃避」「自閉」「自己刺激」「多動」をとりあげる（図1）。

子どもがプレイルームにはじめて来室するとき，子どもにとってそれは新奇な事態ー新奇性ーである。新奇性は，子どもの探索行動を活性化するが，また，ストレンジネスのおそれー新奇性不安ーを喚起する。新奇性不安は，アタッチメント行動によって鎮静化される。探索ーアタッチメントシステムを発達させてきた子どもは，現実場面の，新奇性の出現に対してこのシステムを活用しながら行動の持続性と安定性を保持している。

依存型行動は，他者の関心と介助help を求める行動であって，その発達的起源は，乳児期の無力helplessness にある。

攻撃型行動は，他者の関心を求める依存型である場合と，情動反応をともなう情動型攻撃に分けられる。

逃避型行動は，おそれ事態からの回避で，本来正常な機能をもつが，新奇性不安の基本的解決は，探索操作活動による新奇性の解消にあり，探索ーアタッチメントシステムに組みこまれていない場合は，発達異常とする。

自閉型行動は，環境に対する無関心，無感動によって特徴づけられる。なじみのなさとなじみの識別の欠如，事物の実在性の認識の未発達など，乳児初期の構造に類似する。

自己刺激行動は，＜特定の指る吸う＞，あるいは＜特定のものを吸う＞＜特定のものを抱きしめる＞＜体をリズミックにゆする＞，など自己の身体や事物を対象とする感覚運動性の刺激行動であり，アタッチメント行動の，機能代理の意味をもっているが，探索ーアタッチメントシステムの活動時には潜在化している。

多動型行動は，その知的有効性や，社会的有効性を学習する以前の生得的行動型であり，いわゆるランダムムーブメントの性質をもっている。

これらの行動型のうち，「自閉」「多動」は探索ーアタッチメントシステムの，発達以前の乳児行動の構造に類似し，したがって，このシステムと共在することはない。その他の行動型は，アタッチメントシステムの不安定と共在する。

2. 乳児行動システムの発達

3歳児時点において，健康で正常な心の発達の基準として，探索－アタッチメントシステムをとりあげたが，このシステムの構造化には，「自立性」のシステムと「社会性」のシステムがパラレルに発達し，くみこまれる（図2参照）。

自立性のシステムとは，食事，排せつ，睡眠，衣類の着脱に関する習慣の自立であって，生理的均衡の保持にかかわる行動システムである。

社会性のシステムとは，おとなや子どもとの社会的相互作用を効果的におこなう能力competence を意味し，コミュニケイションの能力を含んでいる。

これらの諸システムの発達的起源をわれわれは生後3カ月間に形成されると思われる母子システムに求めよう。

1）探索操作システムの発達

探索行動システムは，新奇性によって活性化し新奇性の解消によって終息する行動システムであり，操作行動は，その手段的役割をもつとともに，新奇性を創造する機能ももつ。乳児期後半から幼児期の子どものプレイの基本的なモチベイションである。

探索システムは，子どもの心の活動の敏なる状態，alertのstate が比較的安定して持続し，また運動機能が活発化する乳児期後半に発達する。

新奇性は，なじみのない感覚情報を，既存の知識によって同定することに失敗したところで生起する知覚体験である。これは認知構造に不協和をもたらし，これを均衡化しようとして探索活動が起動する。新奇性の解消とは，この新奇な情報が既存の構造にくみこまれ，不均衡が解消したことを意味している。子どもは，環境との相互作用によって，よりよき均衡にむかって，生得的な知的コンピテンスを開発してゆく。探索操作システムは，知的機能の基本的傾向に根ざすシステムであり，感覚機能と運動機能の統合によって構造化されている。

新奇性の成立は，なじみのある認知構造の構築を前提とし，また感覚運動機能の統合が必要であるので，乳児期前半では，発現しない。しかし，新奇刺激への関心は，これより早く，たとえば，新奇図柄刺激への凝視行動は，乳児初期に認められる。凝視行動は，外界への注意の行動的指標である。

2）アタッチメント行動システム

アタッチメント行動とは，特定の他者への接近を求め，それを保持しようとする傾向によって構造化されるシステムである。たとえば，＜泣く＞＜微笑する＞＜声を出す＞などの行動型は，他者の注意をひき，乳児への接近と接触を刺激する機能をもち，乳児期前半の子どもによって活用される。また，他者への＜しがみつき＞＜後追い＞の行動型は，1歳から2歳の子どもにみられるアタッチメント行動である。

アタッチメント行動システムは，心の活性化と安定化を指向する機能をもち，遊びや探索の活性化をサポートし，また不安，疲労，疾患のごときストレス事態で安らぎを回復しようとするときに活動する。

他者の特定化には，乳児期初期の母子相互作用が重要な役割を演ずる。乳児は生得的に女性のかん高い声に応答し，また同調する能力をもっており，早期から聴覚，嗅覚，視覚によって，母親を他者から識別する能力を発達させる。また，母親との見つめあい，声や微笑の応酬など，母子の相互作用は，乳児のstate をコントロールし，感覚運動機能の統合を促進し，また情動の分化と安定化に貢献している。

感覚運動機能の統合は，乳児期知能の主構造である。子どもは生得的な活動，たとえば，＜目をあける＞＜目を閉じる＞＜見つめる＞＜目をそらす＞＜眉をしかめる＞＜微笑する＞＜吸う＞＜泣く＞＜声を出す＞＜頭を動かす＞＜腕や足を動かす＞，といった行動型が，環境との相互作用のなかで特定の効果をつくり出すことを知り，その効果を行動の反復によってたしかめ，この実践の体験をとうして，これら行動型を原始的な反射・リズム構造から解放し，機能的に自立した，これらの感覚運動機能は，より複雑に組織化され，環境の現実を理解し，マスターする能力として，活用される。これが感覚運動知能である。子どもは，感覚と運動の統合の構造化のプロセスのなかで，好奇の喜び，いかり，驚き，おそれ，不安，などの情動を分化させてゆく。

このように乳児期前半の母子相互作用は，探索

ーアタッチメント行動システムの組織化に基本的な役割を演じている。

3) 自立性のシステム

自立性のシステムとは，食事，排せつ，睡眠，体温の維持のごとき，生理的均衡の保持にかかわりをもつ行動システムである。

これらの行動の社会学習には，乳児の保育者への依存性の形成が必要である。依存性とは＜他者の介助を求める＞行動と，そこから二次的につくられた＜他者の注意を求める＞行動の組織をさしている。

出産直後の乳児は，母体からの分離により，ホメオスタシスのしくみは危機にさらされ，「無力」の状況にある。飢餓の事態における＜泣く＞反応は，他者の注意をひき，他者の介助をひき出すシグナル的役割をもち，この行動型は，依存行動として，保育者の応答によって社会的強化があたえられるかぎり持続する。しかし，乳児期後半において，保育者に無視されシグナル的機能が無効となることによって，依存行動は衰退にむかい，自立性のシステムにおきかえられてゆく。このおきかえは，乳児期依存性の挫折という危機状況であり，この危機ののり越えには乳児期に，安定した母子システムのはたす役割が大きい。

臨床型の「依存」は，なんらかの発達的事情により依存性システムから自立性システムへのきりかえに失敗した場合である。

4) 社会性のシステム

社会性システムとは，おとなや子どもとの社会的相互作用を効果的におこなう行動システムであり，他者への関心，他者への積極的な働きかけに対する応答性，他者の表情，身ぶり，言語の利解と，自己の表情，身ぶり，言語による表現などの能力から組織化されており，その基礎には，社会的同調性が存在している。

社会的同調性は，出産当初から乳児に内臓されていると思われ，その生得的な能力は実験的に明らかにされつつある（石井1981.)。

この社会的同調性は，人間に基本的な傾向であることから，乳児初期の母子システムの根幹である。

自立性と社会性の両システムは，乳児期後半から幼児期前半にかけて，探索ーアタッチメントシステムとパラレルに発達する。

3. 新生児期母子相互作用

新生児期の母子相互作用の重要な機能として，新生児の＜state のコントロール＞と＜alertness の state の保持＞をとりあげることができる。

出産当初，新生児の stateは，＜静かな眠り＞quiet sleep，＜動の眠り＞active sleep．あるいは＜レム睡眠＞，＜目覚めて静＞＜目覚めて動＞＜泣く＞の5段階とその移行期に分類しうることはよく知られている。また，一日の state の割合は，＜眠りー静＞＜眠り動＞＜目覚めー動，あるいは泣く＞で，それぞれ$\frac{1}{3}$を占めており，アラートの state である＜目覚めー静＞はきわめて少ない。またこれらの state は，昼ー夜のサイクルと関係なくシフトする。

母親による，ベットからの「抱きあげ」「身体的接触」，おしめのとりかえ，沐浴，授乳，「抱いてゆり動かす」などの行動は，新生児の state に影響をあたえ，たとえば＜泣いている＞状態から＜めざめー静＞の状態，＜目覚め＞から＜眠り＞とシフトすることに効果をあたえる。

これらの保育行動は一般に，昼ー夜のサイクルに順応し，規則性と一貫性をもち，昼ー目覚め，夜ー眠りのおとな型サイクルへのコントロールの発達に役立つと思われる。

一般におとな型サイクルへの移行は，生後4カ月以後に達成され，感覚運動機能の活性化と安定化にともなって，睡眠時にしめる＜レム睡眠＞の割合も減少してゆく。

初産の母親は，出産後2カ月の間に，乳児＜泣く状態＞から＜静か＞にさせ，満足と安らぎをあたえるためにどのようにふるまったら効果的であるかを会得し，「母親」としてのコンピテンスと自信を獲得する。

新生児期の母子相互作用のもうひとつの重要性は，新生児の「心の活力の敏なる状態」を喚起しそれを持続させることにある。新生児期は，alert の state が，一日のうちきわめて少ない。しかし，この状態において，注意行動は活性化し，環境との感覚・運動的相互作用がおこなわれる。

alert の状態で，＜子どもと母親のみつめあい＞は生起し，持続する。この＜みつめあい＞の枠組

のなかで乳児は積極的に微笑し，声を出し，体を動かす。また，この状態において自己の行動と環境の変化との因果関係を理解し，感覚運動知能の統合がおこなわれる。

われわれの研究によれば，出産直後の新生児は，約80分間＜alert＞もしくは＜まどろみ＞のstateにあり（大藪・田口・小嶋1981.），また，母親の母性感受性maternal sensitivity（Klaus,M.H. 1979.）も，この期間高水準を保っているとされていることから，出産直後の母子の接触は，母子システムの形成の起源として重要である。

図3は，新生児期の母子相互作用を拡大して示したものである。

胎児期の＜生理＞＜運動＞＜ステイト＞のそれぞれのサイクルは，生物時計によってコントロールされており，出産後も，しばらくは，環境刺激から保護されていると思われる。また，生得性の運動型は，いずれもリズム構造をもち，環境との相互作用における有効性を乳児は学習していない。その意味から，出産直後の新生児の心の構造は，「多動」「自閉」であるとみることもできる。

臨床型の「多動」「自閉」は，乳児初期のこれらとアナロジカルに比較することによって，乳児初期の母子システムの形成の不全や失敗として，理解することもゆるされよう。この場合，乳児特性と母性特性の両者から吟味することがのぞましい。

発達遅滞の評定法

1. 発達質問紙法

われわれは，この発達臨床仮説にもとづいて，乳幼児期の保健指導のありかたを確立することを目的とし，この3年間厚生省「母子相互作用研究班」のメンバーとして研究にとりくんでいる（小嶋，1980.）。

1970年4月から1980年3月の10年間に，東京都新宿保健所の3歳児健診に来所した子どもの総数は19,113名であった。そのうち，発達指導を必要として，われわれの幼児相談室ー保健所内プレイルームーに来所した子どもは，411名（男291，女120）で，そこから，言語発達のおくれを主訴とする224名（男173，女51）を抽出し，さらに，乳幼児精神発達質問紙（津守，稲毛）をはじめ，観察資料のととのっている111名（男87，女24）を対象として，発達臨床仮説の観点から吟味をおこなっている。

津守・稲毛法は，運動機能，探索操作，社会ーおとな・子どもとの相互作用ー，習慣の自立，言語のそれぞれの領域について，月齢による発達プロフィールが得られるしくみになっており，発達診断の簡易法として臨床的有用性がある。この発達プロフィールを基準として，111名を評定したところ，5型に分類された。

群名	基　　準	総数	男	女
Ⅰ型	すべての領域におくれのないもの	11	8	3
Ⅱ型	言語のみおくれのあるもの	30	25	5
Ⅲ型	言語・社会におくれのあるもの	36	29	7
Ⅳ型	言語・社会・探索におくれのあるもの	19	16	3
Ⅴ型	すべての領域におくれのあるもの	15	9	6

昭和56年度「母子相互作用研究班」報告

これらの型に属する事例について，現在ケース記録や観察資料を分析しているところであるが，Ⅰ型は，探索ーアタッチメントシステムの発達している正常型である。Ⅳ型に，多動，自閉，の子ども達が含まれていることが見出されている。また，Ⅴ型は，いわゆる精神遅滞児である。

運動機能の発達と，自立性のシステムの発達には，身体的成熟の要因が関係しており，一般的な発達遅滞の識別には有効であるが，臨床型の識別には，探索操作システムと社会性システムー社会・言語ーの発達に注目することが重要であり，とくに探索操作システムの発達のおくれは，認知・情動の発達遅滞の指標となりうることを予想させる。

この5型のうち，Ⅱ型は依存ー攻撃，Ⅲ型は，逃避ー自己刺激の結びつきが指摘されたが，Ⅳ型の多動ー自閉ほど明らかでない。図4は，発達プロフィールと母子相互作用との関係を仮説的に図示したものである。

おくれの判定基準は，36ヶ月より2ランク以下とする。

段階 ＼ 遊具	ままごと道具	人形 ぬいぐるみ	抽画用具 塔	粘土	積み木 組み木	連結車	乗りもの	はめ板 パズルボックス	玉さし盤	ハンマーボール ハンマーペグ	ボール	パチンコ玉の回転機
Ⅷ	・人形を友達にしたり、お母さんになったつもりで料理を作って出す	・名前をつけたり、友達のつもりで抱う	・手本を見て、水平線、垂直線をかく ・頭らしきものをかく	・数字を作ったり、何かの形に作る	・トンネルを作り自動車を通して遊ぶ	・荷物をのせたり、トンネルを作って通したりして遊ぶ	・人形をのせて動かしたり、トンネルを作って、その下を通したりする	・他者と交互に入れたり、競争したりする	・数字とか形を作る			
Ⅶ	・人形に飲ませたり、粘土やマーブルを料理にみたてて遊ぶ	・食べさせたり、ふとんにねかせたりする	・円がかける ・何かのつもりでかく	・ままごとの材料に使い、何かにたとえる	・手本をまねてトンネルを作る ・ロボットや自動車のつもりで組み立てる	・ポッポーといって、汽車のつもりで動かす	・タクシーとか、ブーブーといいながら動かす	・立体パズルが正しく入れられる	・色別にさす	・大工さんとか、モグラたたきとかといって打ちこむ	・ボーリングで野球のつもりで投げたりする	・つかえると台をゆすったり、傾けたりして玉を出す
Ⅵ	・飲むふり、注ぐふりをする ・ガスの上にナベをのせる	・頭をなでる。 ・大事そうに抱う	・自発的なぐりがき ぐるぐるがき	・ナイフ、棒で切ったり、のばしたりする	・ハンマーを使って組み立てる ・いろいろな形に積み重ねる	・長く連結して動かす	・ひもを引いて歩きまわる	・円・三角・四角が入れられる	・一列きちんととか穴全部とか、目的をもってさす	・ハンマーで確実に打ちこむ	・投げたり、受け取ったり、キャッチボールになる	・ホースに入れて動きを目で追い、出て来た玉を拾う
Ⅴ	・テーブルやお盆にコップ等を並べる ・レンジのスイッチを点滅させる	・服や靴を取り去る ・目とか口に触る（自分の口にも触る）	・線状のなぐりがき	・丸めたり、細長くしたり、容器に押しこんだりする	・高く重ねてくずすことを繰り返す ・穴へ棒をさしたりはずしたりする	・連結する		・円が入れられる	・穴にさし込む	・ハンマーで押したり、出口の穴からボールを入れたりする	・穴に入れたり、目標の方向かって投げる	・ホースに入れる
Ⅳ	・コップを並べたり、重ねたりする ・コップの中に小粒を入れたり、あけたりする	・椅子に座らせる ・人にもたせる	・クレヨンを紙にうちつけるようにしていて点をつける	・ちぎったり、押しつけたりして、形をかえる	・2～3ケ重ねて並べる	・連結はしないが、並べておく、長くする ・寝ころんで動かす	・本体をおして動かす ・寝ころんで動かす	・形に関係なく入れようとする ・一度入った形の所から次も入れる	・さしてあるペグをはずす	・手で押し入れる ・ボールやペグを両手に持って打ち合わす	・投げる（方向定まらない）	・コップやマスに入れて、移しかえたりする
Ⅲ	・なめる ・放る ・テーブルからザーッと落とす	・なめる ・放る ・椅子から払い落とす	・なめる ・クレヨン・画用紙をもて遊ぶ	・なめる ・臭いをかぐ ・感触を楽しむ	・なめる ・投げる	・なめる	・なめる	・なめる ・はめてある所からはずす	・なめる ・集めてガシャガシャさせる ・ペグを放る	・なめる ・台を倒したり、裏返したりする	・なめる ・持ったり落としたりする	・なめる。 ・ガシャガシャ音を楽しむ
Ⅱ	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす	・見る ・体を動かす
Ⅰ	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心	無関心

2. 遊具へのとりくみ行動による評定

ピアジェの発達理論などをよりどころとし，プレイルームの観察資料を詳細に吟味し，つぎのごとき評定表を作成した。

使用遊具は，主として，フレーベル館の木製遊具であるが，パチンコ玉の回転筒のように，われわれの創案したものもある。

行動変化のステップは，Ⅰ（0～1ケ月），Ⅱ（1ケ月～4ケ月），Ⅲ（4ケ月～8ケ月），Ⅳ（8ケ月～12ケ月），Ⅴ（12ケ月～18ケ月），Ⅵ（18ケ月～24ケ月），Ⅶ（24ケ月～36ケ月）Ⅷ（36ケ月～60ケ月）の8ステップに分けられている。

プレイルームで観察される記録にもとづいて，評定する。3才児健診対象児は，発達に遅滞がなければ，Ⅶ，Ⅷのステップに達していることが期待される。

Ⅰに該当すれば，1点，Ⅱであれば2点，同様に点数をおきかえて，面接ごとに，それぞれの遊具について，スコアをする。

3. 社会ー情動行動による評定

ここでは，プレイルームにおける，1) 母親への行動と，2) ストレンジャー（保健婦）への行動を観察し，つぎにあげる行動リストにもとづいて，評定する。

ここでも，1～8点に評定できるようになっている。

子どもの社会・情動行動

母に対して

Ⅰ ◦母と目が合わない。
- ◦母の方をみない。
- ◦母が遊具をみせても，見ていない。
- ◦母が抱いた時にも顔をみない。
- ◦くすぐったり，『たかいたかい』をしても反応がない。無表情でいる。
- ◦母が服を着せたり，靴をはかせたりしていても，その方を見ていないで，ボンヤリとされるがままになっている。
- ◦母が呼びかけても反応がない。

Ⅱ ◦母の方から目を合わせれば，目が合う。
- ◦遊具を目の前にさし出せば，それを見る。
- ◦子どもの方から目を合わせる。
- ◦母の顔をのぞき込む。
- ◦目が合うとニコニコする。

Ⅲ ◦母が抱くとうれしそうにニコニコする。
- ◦『たかいたかい』や『ぐるぐるまわし』をすると喜ぶ。
- ◦『イナイイナイバー』を喜び，ニコニコする。
- ◦母がそばに居るともたれたり，ひざに腰かけたりする。
- ◦子どもの方から，母のひざにすわったり，背中にもたれたりする。
- ◦母の顔に自分の顔を押しつけたり，なめたり，手でなぜたりする。
- ◦母のかみの毛や耳をいじる。
- ◦母のかみの毛を引っぱったり，体や顔をたたいたりする。

Ⅳ ◦母に手をもってもらい一緒に遊具を操作する。いやがらない。
- ◦自分でとれる遊具でも母の手でとらせる。
- ◦遊具の動きが止まると，母の手をそれにあてがい動かそうとする。
- ◦母の声に反応する。
- ◦「ダメ」と言われると動作を止める。
- ◦声をだして母の注意を引く。
- ◦母にむかって声をだす。
- ◦母が近づくとスーッとその場をはなれる。
- ◦目が合いそうになると視線をそらす。
- ◦母が体にさわったり，顔を近づけたりするとよけたり，その手を押しのけたりする。
- ◦抱いたり，ひざにすわらせたりしてもすぐおりてしまう。

Ⅴ ◦プレイの間ずっと母のひざにすわっている。
- ◦母のひざにすわったままで，そばの遊具をいじる。
- ◦母の移動につれて動く，後を追う。
- ◦母がそばをはなれると泣く。
- ◦母の姿が見えないと泣く，さがす。
- ◦母のそばに居る（母を中心に半径60*cm*以内）。
- ◦時々母のそばに行く。
- ◦遊具を母のそばにもってきて，母のそばで遊ぶ。

○度々母の方を見ながら遊ぶ。
○度々「ママ」「ママ」と言いながら遊ぶ。
○おどろいた時，痛い目に合った時，母のところへとんでゆく，しがみつく。
○遊具を提示したり，指さししたりして母に知らせる。
○簡単なことばでの指示，誘いに従って行動する。
○母がたずねると指さしや動作で応答する。

Ⅵ○自分の行きたい方へ母を引っぱって行く。
○遊具のところまで母をつれてくる。
○自分でできない時，母にやって欲しい時助けを求める。
○母のことばのオーム返しをする。
○簡単なことば，あるいは動作で母に対して意志表示をする。
○好きな遊びを始められない時や，続けることを妨げられると泣く。

Ⅶ○母が遊具を操作してみせると見ている。
○母がやってみせたり，遊具をさし出して誘うと，その遊具を扱かう。
○自分から母へ遊具をもっていって遊びに誘う（ex.聴診器を母にわたし，自分のお腹を出す乗った車のひもを母にさし出し，ひっぱらせる）。
○ボダルのやりとりや，ままごとのやりとりをする。
○遊具の操作ができたり，完成したりすると母の顔を見たり，その遊具をもって行って見せる。
○自分の使っている遊具に母がさわると「ダメー」とか「イヤー」と抗議する。

Ⅷ○ほめられると喜ぶ。得意そうな顔をする。
○はげますと，組み立てや操作を終りまでやる
○電話ごっこで母と会話する。
○ままごとをしながら母と会話する。
○きかれると色を形を答える。
○たのむと歌をうたってくれる。
○母に「～しよう」と誘う。
○「何して遊びたい」とか「何をしているところ」と報告する。
○順番がわかり，母と交互に遊具を操作したり，完成を競ったりする。

保健婦（ストレンジャー）に対して

Ⅰ○保健婦と目が合わない。
○保健婦の方を見ない。
○保健婦が遊具を見せても見ていない。
○保健婦が遊具を操作して見せても見ていない。
○保健婦が抱いた時にも顔を見ない。
○くすぐったり，『たかいたかい』をしても反応がない，無表情でいる。
○保健婦が服を着せたり，靴をはかせたりしていても，その方を見ていないで，ボンヤリとされるがままになっている。
○保健婦が呼びかけても反応がない。

Ⅱ○保健婦の方から目を合わせれば，目が合う。
○遊具を目の前にさしだせば，それを見る。
○子どもの方から目を合わせる。
○保健婦の顔をのぞき込む。
○目が合うとニコニコする。

Ⅲ○保健婦が体にさわったり，抱いたりしても嫌がらない。
○保健婦が抱くとうれしそうにニコニコする。
○『たかいたかい』や，『ぐるぐるまわし』をすると喜ぶ。
○『イナイナイバー』を喜び，ニコニコする。
○保健婦がそばに居るともたれたり，ひざに腰かけたりする。
○子どもの方から，保健婦のひざにすわったり背中にもたれたりする。
○保健婦の顔に自分の顔を押しつけたり，なめたり，手でなぜたりする。
○保健婦のかみの毛や耳をいじる。
○保健婦のかみの毛を引っぱったり，体や顔をたたいたりする。
○保健婦が入室したり，子どもに近づいたりすると，子どもの動きが止まり，じっと見つめる。
○保健婦が近よったり，声をかけると泣き出す。

Ⅳ○保健婦に手をとってもらい一緒に遊具を操作する。いやがらない。
○自分でとれる遊具でも保健婦の手でとらせる
○遊具の動きが止まると，保健婦の手をそれにあてがい動かそうとする。
○保健婦の声に反応する。
○「ダメ」といわれると止める。
○声を出して保健婦の注意を引く。
○保健婦にむかって声を出す。
○保健婦が近づくとスーッとその場をはなれる。
○目があいそうになると視線をそらす。
○保健婦が体にさわったり，顔を近づけたりするとよけたり，その手を押しのけたりする。
○抱いたり，ひざにすわらせたりしてもすぐにおりてしまう。

Ⅴ○プレイの間ずっと保健婦のひざにすわっている。
○保健婦のひざにすわったままで，そばの遊具をいじる。
○保健婦の移動につれて動く，後を追う。
○保健婦がそばをはなれると泣く。
○保健婦の姿が見えないと泣く，さがす。
○保健婦のそばにいる（保健婦を中心に半径60*cm*以内）
○時々保健婦のそばに行く。
○遊具を保健婦のそばにもってきて，保健婦のそばで遊ぶ。
○度々保健婦の方を見ながら遊ぶ。
○度々保健婦にむかって呼びかけながら遊ぶ。
○おどろいた時，痛い目に合った時，保健婦のところへとんでゆく。しがみつく。
○遊具を提示したり，指さししたりして保健婦にしらせる。
○簡単なことばの指示，誘いに従って行動する。
○保健婦がたずねると指さしや動作で応答する。
○保健婦が入室した時とか近づいた時，母のところへとんでゆく。母にしがみつく。母に身を寄せる。かくれるようにする。

Ⅵ○自分の行きたい方へ保健婦を引っぱって行く。
○遊具のところまで保健婦をつれてくる。
○自分でできない時，保健婦にやって欲しい時助けを求める。
○保健婦のことばのオーム返しをする。
○簡単なことば，あるいは動作で保健婦に対して意志表示をする。
○好きな遊びを始められない時や，続けることを妨げられると泣く。
○

Ⅶ○保健婦が遊具を操作してみせると見ている。
○保健婦がやってみせたり，遊具を差し出して誘うと，その遊具を扱う。
○自分から保健婦へ遊具をもっていって，遊びに誘う（ex. おもちゃの聴診器を保健婦に渡し，自分のお腹を出す。乗った車のひもを保健婦にさし出し，ひっぱらせる）。
○ボールのやりとりや，ままごとのやりとりをする。
○遊具の操作ができたり，完成したりすると保健婦の顔を見たり，その遊具をもっていって見せる。
○自分の使っている遊具に保健婦がさわると「ダメー」とか「イヤー」と抗議する。

Ⅷ○ほめられると喜ぶ。得意そうな顔をする。
○はげますと，組み立てや操作を終りまでやる。
○電話ごっこで保健婦と会話する。
○ままごとをしながら保健婦と会話する。
○きかれると色や形を答える。
○たのむと歌をうたってくれる。
○保健婦に「〜しよう」と誘う。
○「何して遊びたい」とか「何をしているところ」だと報告する。
○順番がわかり，保健婦と交互に遊具を操作したり，完成を競ったりする。

なお，この定評リストは，試案であり，今後改訂を必要とする。

第5図は，われわれの発達臨床のステップと，母子相互作用ならびに発達指導との関係をしめしたものである。

ⅡからⅧまでの，それぞれのステップは，精神発達の節目であり，その時期ごとにきめこまやかな発達指導がのぞましい。

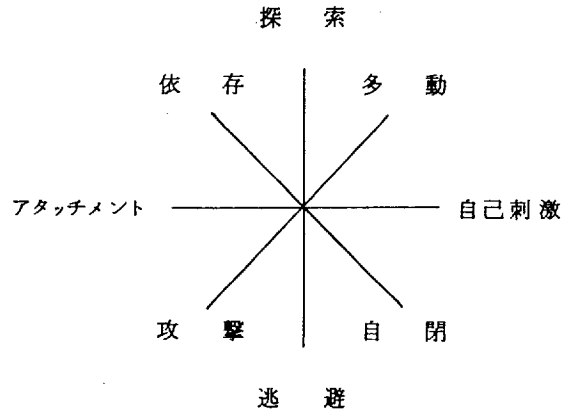

図1　臨床型

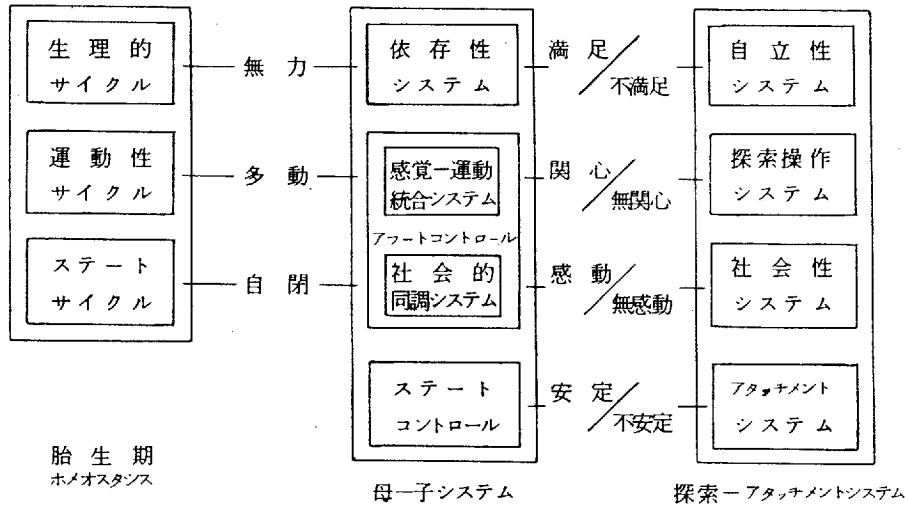

図2　乳児行動システムの発達

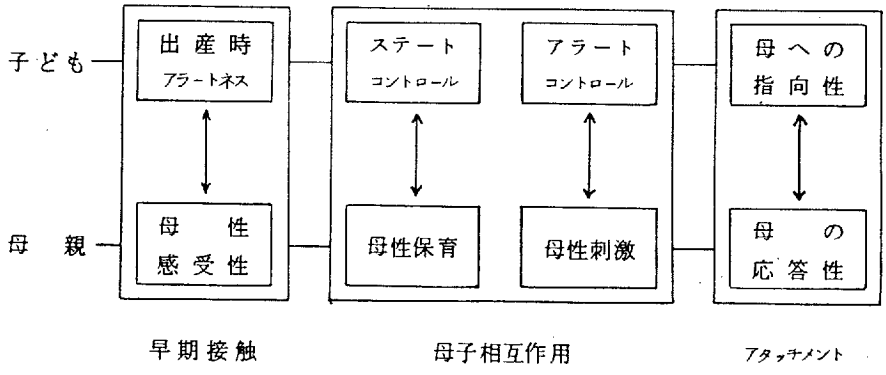

図3　母一子アタッチメントの形成

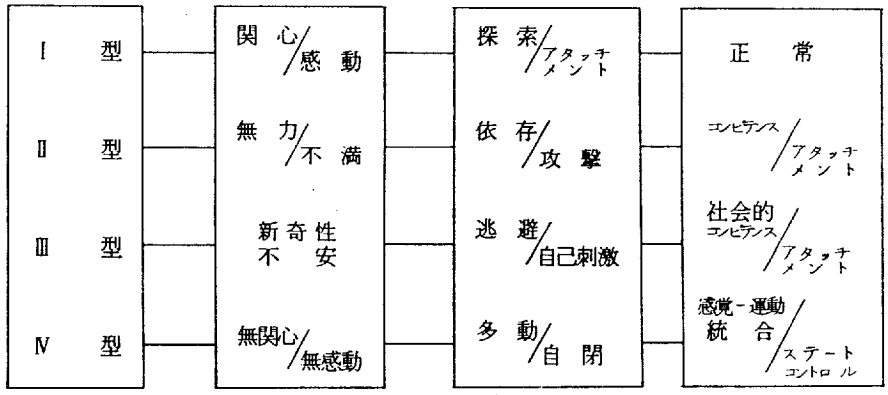

図4　発達プロフィールと母子相互作用

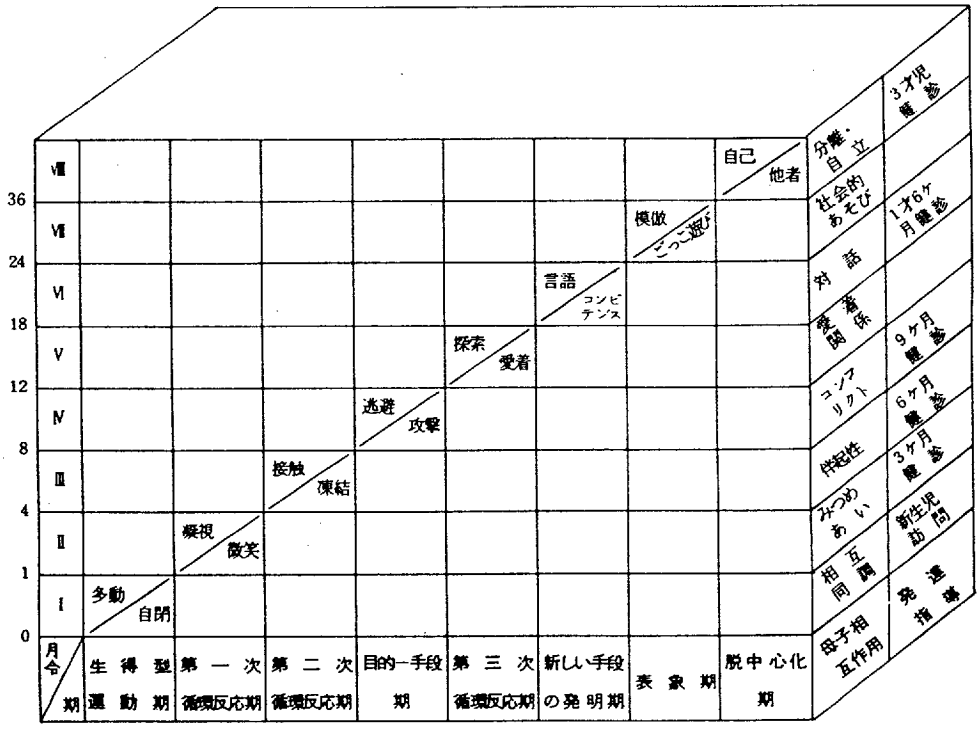

図　5

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

この研究は,乳児期母子相互作用理論に基礎をおき,保健所などの乳幼児保健指導の現場で,容易に活用できる精神発達遅滞の早期発見の方法を検討したものである。

はじめに,母子相互作用理論による発達臨床仮説について概説し,つぎに,発達遅滞の評定法をとりあげてみたい。